

★ 早生品種は出穂前後の湛水管理に移行
★ コシヒカリの幼穂形成期は平年並み

1 君津地域の生育概況

6月上中旬は、気温・日照ともに高く推移したため、県全体では5月植えのコシヒカリの生育が進んでおり、君津管内でも、生育は順調に進んでいます。4月25日植えのコシヒカリの幼穂形成期は6月24日と平年並みで、7月に入ると穂肥の適期を迎えます。早生品種では穂ばらみ期に入っており、出穂期15～10日前の冷害危険期に入っているため注意が必要です。草丈は前半は徒長気味のほ場が多かったのですが、平年並みになってきています。

関東地域は6月14日頃に梅雨入りし、6月下旬になって雨が本格化してきました。低温に弱い飼料用米専用品種を作付けている場合は、特に注意してください。

2 生育調査ほの調査結果（幼穂形成期）

品種		田植え日	葉令	草丈(cm)	莖数(/株)	莖数(/㎡)	単葉葉色
ふさおとめ① (袖ヶ浦市)	R3年	4/13	11.2	56	38.6	599	42.9
	平年値	4/16	11.1	54.8	41.3	632	43.4
	平年比	-3	0.1	102%	93%	95%	-0.5
ふさおとめ② (袖ヶ浦市)	R3年	4/16	11.4	59	42.7	658	42.9
ふさこがね (木更津市)	R3年	4/19	10.5	43	24.0	457	40.0
	R2年	4/23	10.0	51	20.9	397	40.9
コシヒカリ (君津市)	R3年	4/25	10.9	63	34.3	583	35.5
	平年値	4/27	10.9	66	41.8	656	37.2
	平年比	-2	±0	95%	82%	88%	-1.7
粒すけ① (君津市)	R3年	5/3	11.2	54	27.0	429	39.9
	R2年	5/2	11.2	63	35.3	575	36.7
粒すけ② (木更津市)	R3年	4/16	11.0	51	36.9	683	39.2
	R2年	4/21	-	60	30.8	581	38.2

※ふさおとめ①の平年値は平成23年～令和2年の平均、コシヒカリの平年値は令和1、2年の平均。ふさおとめ②は令和3年から新たに調査ほ場になったため、平年値はありません。調査日：ふさおとめ、ふさこがね、粒すけ②は6月14日、コシヒカリは6月24日、粒すけ①は6月25日

-郵便で配信している方へお願い-

通信費削減のため、「あぜみち」の配信を、郵便から、電子メール又はFAXへの切り替えを進めています。切り替えをご希望の方は、下記までご連絡ください。

連絡先 鐘ヶ江(かねがえ) y.knge@pref.chiba.lg.jp 0438-23-0299(電話)

3 これからの管理のポイント

① 節水へのご理解とご協力を！

今年の梅雨は例年に比べ、少雨の傾向が続いているため、渇水への対応が必要になる可能性があります。ただし、登熟期の水不足は、減収と、乳白米等の白未熟粒の発生による品質低下の原因になるので、かけ流し等には注意し、限られた水資源を有効に使うようにしましょう。

● 穂ばらみ期から出穂2週間後までは湛水管理

高温時の品質低下を防ぐために、田面が露出しないような湛水管理を行いましょう。

● 出穂2週間後～出穂25日後までは間断かんがい

米粒の充実と品質向上のために、出穂25日後までは、水が必要となります。

● 水位や用水の状況に応じて農薬の剤型を選択

農薬のジャンボ剤や豆つぶ剤は省力的ですが、5～6cm程度の深水が必要です。水深が浅いと有効成分が十分に拡散できず、効果が不安定になります。用水量が少なく、水が貯めにくい時には、粒剤や液剤の使用を検討しましょう。

※三島ダムの水位低下による渇水への対応として、節水への御理解と御協力をお願いいたします。

② 斑点米カメムシ類の防除

斑点米カメムシ類は、大型カメムシ類とカスミカメムシ類に大別されますが、いずれも、水田周辺にいる成虫が水稻の出穂後に水田に侵入します。防除適期は、成虫飛来期である「穂揃期（出穂期から2、3日後）」と、水田に侵入した大型カメムシ類が産卵し、卵から幼虫が孵化する「出穂15日後頃」です。大型カメムシ類は成虫より幼虫の被害が大きいため、多発年は要注意です。出穂が周辺よりも早い水田や遅い水田は集中的な被害を受けることがあるので、特に注意しましょう。

出穂期前後の畦畔の草刈りはカメムシ類を水田の中に追い込んでしまいます。畦畔雑草は出穂の2週間前頃までに刈り取り、出穂期の後は、収穫まで雑草が出穂しないように草刈りしましょう。

③ 病害の防除

今年は、現時点では、低温や多雨条件が続いている状況ではないため、いもち病や稲こうじ病の危険性は高くないと予想されます。その一方で、高温で発病が助長される紋枯病については多発する可能性があるため注意してください。

○いもち病：止葉などの上位葉に病斑がある場合は、穂いもちに移行し減収するおそれがあることから、穂ばらみ期に治療効果のある薬剤で防除しましょう。さらに発生が続く場合は、天候等を考慮した上で穂揃期にも追加防除を行いましょう。

○稲こうじ病：穂ばらみ期が低温の場合や降雨が多い時に発生が多くなります。前年に多発したほ場では防除時期である出穂前に、薬剤防除しましょう。

○紋枯病：茎数が多いと発生しやすくなります。また、紋枯病による葉鞘の枯れ上がりは倒伏を助長し、収量にも影響します。飼料用米品種でも発生がみられるので注意しましょう。防除適期は幼穂形成期から5～10日後で、穂ばらみ後期までに散布する必要があります。また、薬剤により、予防効果と治療効果のある剤があるため、薬剤の選択には注意が必要になります。

④ 飼料用米（専用品種「アキヒカリ」含む）栽培の注意点

米価低迷の対策として、飼料用米への転換が進んでいます。専用品種「アキヒカリ」は耐冷性が弱いので、幼穂形成期から出穂期までに低温になった場合は深水管理で保温しましょう。また、飼料用米の栽培にあたっては以下の点に注意してください。

- ・収量とタンパク含有率を高めるために穂肥を適正に施用しましょう。
- ・収量を高めるために多肥栽培すると紋枯病が多発するため、防除を行いましょう。
- ・斑点米カメムシがほ場内で増殖すると周辺の主食用米への影響があります。防除を！

※ 次号は「10月下旬」発行予定